

# 「悲観的」な色をめぐる考察 —フランス語と日本語に借入された英語の blue—

新谷 真由  
(筑波大学特任研究員)

Berlin & Kay (1969) と Kay & McDaniel (1978) は、構造主義的視点からの色彩語研究が主流であったときに、色彩および色彩語の意味を人間の普遍的認知能力から問い直した先駆的な研究である。両者が主張したことは、人類には普遍的な知覚能力が備わるため、知覚される内容は当然同じであり、知覚される焦点色 (color foci) こそが色彩語の意味であるということであった。しかしながら、色彩語が比喩表現として現れる場合、色彩語の意味が普遍的であると認めがたい例もある。例えば、「悲観」や「気の沈み」を表す色彩が、フランス語では黒 (noir) であり、英語では青 (blue) であるという非対称的な事実は、この反例となりうる。色彩語が比喩的な意味で用いられる場合、焦点色以上の何かが色彩語の概念化に関わっていることが考えられる。

本発表では、以上を踏まえて、次の二点について議論を行う。(i) フランス語の noir と英語の blue が比喩的に「悲観」や「気の沈み」を表す場合、それらが何に基づいて概念化されているのかを文化的な視点から探る。(ii) 英語で「悲観」を表す blue は、現代フランス語に le blues という形で借入されている。日本語に借入された「ブルー」と対照的に分析することにより、両個別言語において借入語としての blue がどのような位置づけを持つのかを明らかにする。